

高齢者福祉向けAPP開発の方向性

Draft

はじめに

- このDraftは高齢者福祉サービスのICT化を目指したものである
- 考え方としては1事業所のためのものでなく、法人、地域、高齢者福祉サービスの基幹システムとして運用を考える
- また、本Draftでは施設型を念頭に置いて設計しているが、通所、訪問も一元化して設計を進めてみたい

Base Plan

¥ 広告・実証実験フィールド

食品、サプリメントなど認知症ケアにつながる商品のテストフィールド
 栄養士との協力のもと必要なデータを自動出力
 福祉関連商品・サービス広告

¥ データを利用した商品開発

例) バイタルチェック
 APP運動体温計、血圧計
 高齢者福祉に関心のある企業とのデータをもとにした共同研究会

APP利用基本料金
 initial cost
 ユニット数×100,000
 running cost
 定員数×500円/月

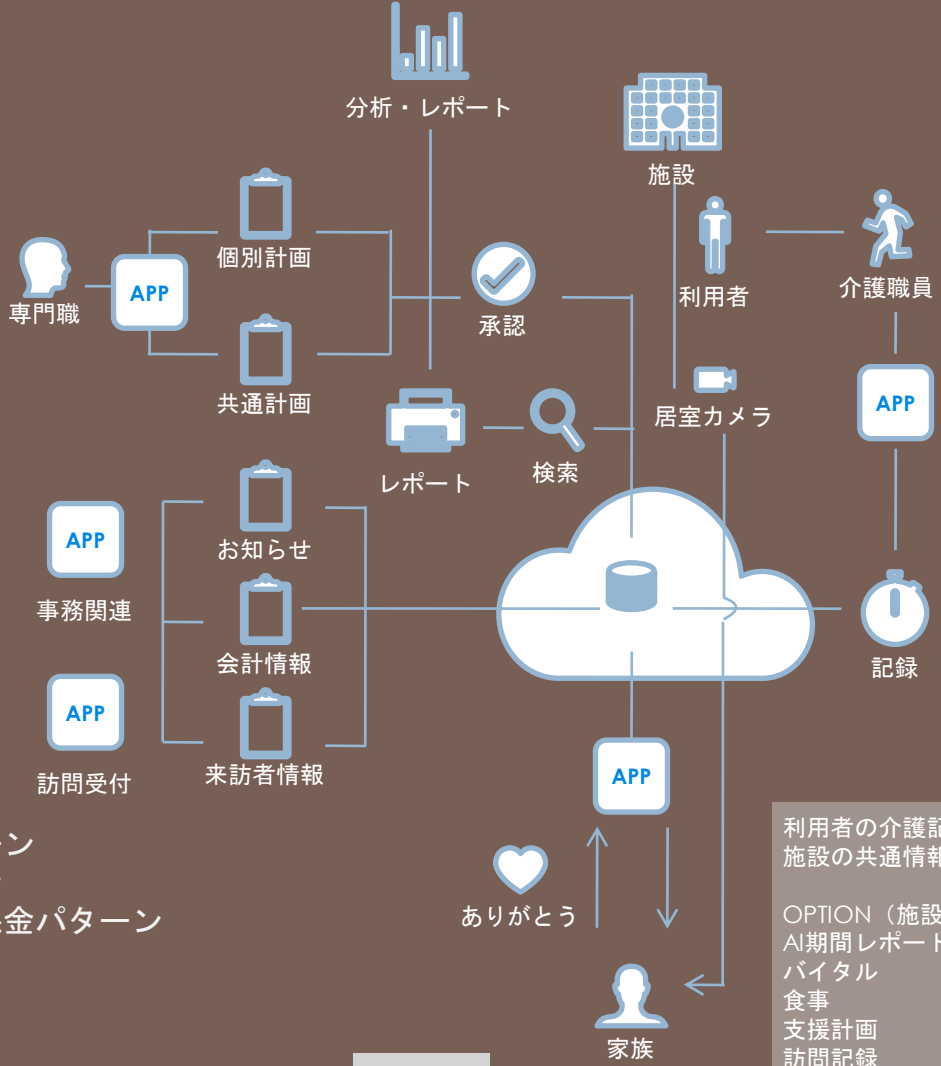
OPTION利用料金
 居室カメラ
 既存データのDBアペンド
 バイタル
 食事
 支援計画

看護職員 (医師)
 機能訓練指導員
 栄養士
 生活相談員
 ケアマネジャー

事務職
 事務関連
 訪問受付

継続課金パターン
 + 広告パターン
 + オプション課金パターン

第三者相談
 衣類
 広告



¥ 広告・教育・有料サービス

参考図書
 法律
 eラーニング
 民間資格
 個人情報
 テスト
 コンテスト

カウンセリング



APPは
 スマホ (iOS、Android)
 PC、mac対応とします。

広告・教育
 介護職員 (施設補助制)
) 受講者数による割引
 介護に関するコンプライアンス、リスクマネジメント (ヒヤリハットとの連動) などAPP利用と連動した実践的資格制度≠知識だけ

利用者の介護記録の逐次通知
 施設の共通情報 (お知らせ)
 OPTION (施設が選択した場合)
 AI期間レポート
 バイタル
 食事
 支援計画
 訪問記録
 居室カメラ

開発のポイント(見学・ヒアリングを通しての確信)

○ AI活用方法が大切！

- 家族との介護情報の共有（情報の選択、頻度、仮説・・・）

- 職員の記録作業の軽減 入力（音声入力に対応する対話型システム、誤変換修正）

○ システム導入支援システム

○ 次のイノベーションを起こすべき！

- これらを実装しないAPPは後発では意味を持たない

- それなら 既存APPの販社でやっていく？

家族との介護日誌の共有とコミュニケーション

いつでも
家族が変更可

情報の選択

内容

通知方法・頻度

情報へのアクセス

職員のためのAI

入力支援

活用による業務軽減

内容

- 介護職、看護職
- 入力はPCキーボードの方が楽（慣れ）、手書きはありえない、音声入力はどうも文章を話せない
- だったら、入力のためにAIを利用する
- バイタルについては近い将来機器からデータを送信できるが、APPでも対話型入力をサポート

超高齢社会における東京のあり方 懇談会 提言骨子(案)の概要より

<ICTの活用>

○ICTの活用で労働力の不足を補い、地域課題の解決を図っていく取組が必要

○行政においてもICTを活用した地域課題の解決について、より積極的な検討が必要

○認知症の人のICTを活用した見守りなどが進められており、更なる活用促進に期待

働き方改革

助成金・補助